

Whoops!

2016 WINTER Vol.12

多摩美術大学フィールドワーク設計ゼミ

NAVIGATION

PHOTOGRAPH 『それからの街』

音楽のような手法で演劇を制作

Whoops! 用語事典

用語 No.5 【ゲキ×シネ】

用語 No.6 【2.5次元ミュージカル】

[TAKE FREE]

あっ!の場所

ゲームに出てきそうな地下帝国!?

大谷資料館を探検する

あっ!の展覧会

『村上隆の五百羅漢図展』

横浜イルミネーション物語

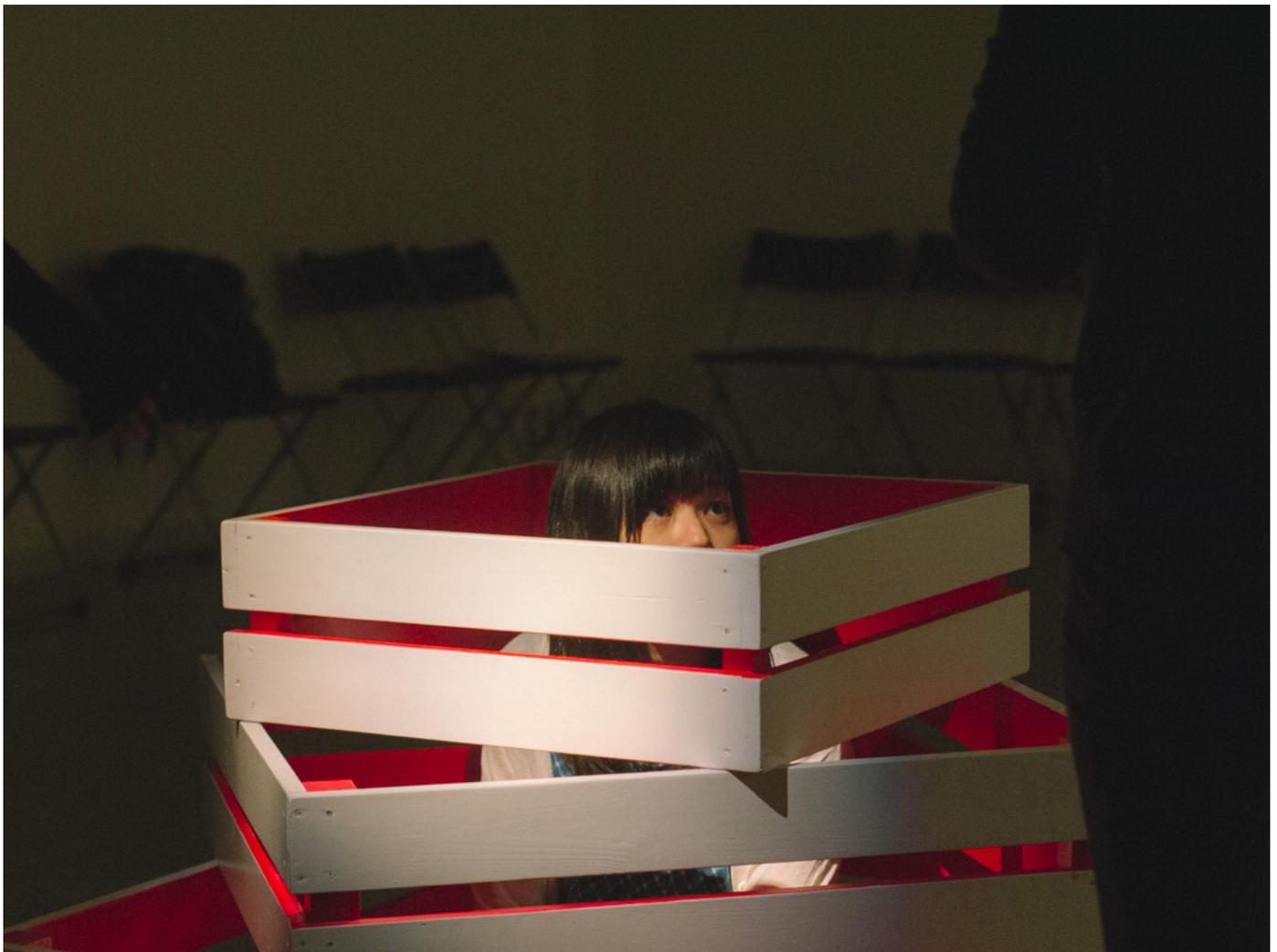




photo by takaramahaya (2、3ページ)

昨年本校芸術学科を卒業した菊地敦子さんが出演する演劇があると聞き、会場へ向かった。『それからの街』と題されたこの作品は、BGMなどが流れることは一切ない、しかし音楽のようにリズムよく台詞が流れる現代口語劇である。作・演出は東京芸術大学4年の額田大志さん。この作品は彼の卒業制作でもある。

会場の部屋の四辺に椅子が並べられ、360度観客が囲う中で演劇は行われる。電球が付けられた赤い正三角形の枠が3つ、天井から吊り下げられ、床には正方形の木枠が3つ。何とも不思議な空間だ。

「あの……」会場が暗転すると、誰かを呼びかける女性の声が聞こえる。「あの……」「あの……」「あの……」5拍子のリズムで繰り返されていくその言葉に、何だか不気味な気持ちと、これから何が始まるのかという期待が生まれる。照明が舞台を照らすと、4人の女性がいた。彼女たちはそれぞれ、くるくると歩き回ったり、木枠に座っていたり…そして冒頭の「あの……」に続く台詞が始まる。

「あの、駅からこの道を真っ直ぐ行くと、そんなには、」

70分の公演の中で、最後まで登場し続ける重要な台詞である。そこに重なるように聞こえてくる綺麗な声、音階のついた「いー

まー……すーかー……」という言葉が発しているのは菊地さんだ。

4人の役者の台詞が、それぞれリズムをもち、音楽のように流れていく。その中で、確実にストーリーが進んでいく。この街で過ごす4人の生活が絶妙に絡み合う日常を描きながら、この街の「それから」の可能性を見せる。

4人の会話は、同じ部分が何度も繰り返されたり、途中が抜け落ちたりする。同じやりとりが回転するように向きを変えて繰り返されることもある。3度繰り返されたことがあった。そのときには彼女たちの表情が固まった。恐怖を感じた。

菊地さんの声がかまた聞こえてきた。「クリーニング屋、お弁当屋、博多ラーメン屋、古本屋、精肉店、…富士見橋」

3人の登場人物の後ろでBGMのように響いている。このような街の店の名前の羅列に加え、「団地」の「A棟」や「E棟」という言葉も出てくる。駅からマンションまでの道のりも、台詞

として出てくる。まるで街の地図を言葉で描いているかのようだった。

作者の額田大志さんは、東京芸大でミニマルミュージックを専攻し、作曲を学んでいるという。この作品は音楽ではない。しかし、まさに楽譜を書くように作られている。台詞が旋律だとすれば、リズムが分かるように書かれている。すべての台詞の拍は計算されており、異なるリズムを同時に演奏する「クロスリズム」を取り入れているという。

こうしてできた脚本は、もともと20ページ。それを再構築するうえで、どうやって演劇に落とし込み、いかに展開していくか。指揮者や楽器奏者が譜面を見ながら演奏するときのように、演出家と俳優たちは脚本を解釈し、お互いの呼吸を図りながら表現するのだ。

取材・文・レイアウト = 宮坂咲紀

PHOTOGRAPH

音楽

のような手法で演劇を制作



演目：『それからの街』
 日程：2015年11月14～15日
 会場：恵比寿 site
 作・演出：額田大志
 出演：宇都有里紗、相澤友希、
 山崎葵、菊地敦子
 総合美術：タカヤマハヤ
 サウンドデザイン：蓮尾美沙希
 舞台監督：葉袋桃子
 制作：杉浦一基
 制作協力：鈴木啓佑、佐藤菜

◇◇◇◇用語 No.6 【2.5次元ミュージカル】◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

3次元の世界、それは現実の世界。2次元の世界は、アニメや漫画、ゲームの世界を指す。では2.5次元とは何か。2次元の世界を舞台やミュージカルに落とし込み、3次元の俳優が2次元のキャラクターを演じることによって生み出されるエンターテインメントの世界。それが2.5次元だ。そこではいったい何が起きているのだろうか。



2次元の世界のキャラクターを現実の俳優が演じ、再現することによって生み出される2.5次元の世界。どのようにして2次元の世界を現実に再現しているのだろうか。2.5次元の代表作の舞台『弱虫ペダル』を例に挙げて見てみたいと思う。

原作は、自転車競技を題材としたスポーツ漫画である。俳優は衣装やメイク、ウィッグなどを使用して原作のキャラクターの容姿にできる限り近づける。すると、いわゆるコスプレのような姿になる。

演じるキャラクターのセリフは、個性が際立つ漫画独特の言い回しそのまま引用されている。一番注目したいのは、自転車競技の話にもかかわらず、本物の自転車が演目の中でほとんど使用されないところだ。

特に驚くのは、見せ場であるレースの場面では自転車には一切乗らないこと。演者らはドロップハンドルのみを握りしめ、身体を動かし足をバタつかせて走ることによって、漫画で描かれているレースの迫力や臨場感を演出している

のだ。パッと見には滑稽な姿だが、演者の汗を流しながらの迫真の演技と絶妙なタイミングで動かす身体によって、漫画そのものの手に汗握るレース展開を再現している。そこに照明の効果や舞台セットの緻密な移動などが重なることによってリアリティがさらに増すのである。

ここには確かに2次元である漫画と3次元である俳優が交差する世界、2.5次元が広がっていた。

文 = 加藤千裕 イラスト = 青山真理恵 レイアウト = 中村昂史

芸術を「考える」「実践する」。

机の上だけに留まらない

日々の学びから

「理論」をつかむ。

多摩美術大学芸術学科

八王子キャンパス

URL : <http://www.tamabi.ac.jp>

芸術学科に関するお問い合わせ▼

TEL : 042-679-5627 FAX : 042-679-5649

E-mail : geigaku@tamabi.ac.jp



Whoops! 用語事典

◇◇◇◇◇用語 No.5 【ゲキ×シネ】◇◇◇◇◇



<ゲキ×シネ>は、2004年の劇団☆新感線公演『鬪城の七人〜アカドクロ』を銀座・丸の内東映（現・丸の内TOEI）で上映したのが初。その後、『五右衛門ロック』『蒼の乱』など14本の作品を公開し、現在にいたる。DVDやブルーレイのソフトはイーオシバイドットコム (<http://www.e-oshibai.com>) にて発売中。

2014年に舞台上で上演された『蒼の乱』が、1年後に<ゲキ×シネ>として生まれ変わって帰ってきた。物語の始まりは平安時代。渡来衆の長・蒼真（天海祐希）と武者・将門小次郎（松山ケンイチ）は将門の故郷で結ばれるが、時代の波に襲われ刃を交える運命となってしまう。物語は、役者が奏でる歌と踊り、鮮やかな殺陣が混じり合い、進んでいく。愛し合う2人の戦いは壮絶な結末を迎える。<ゲキ×シネ>は生の舞台とは違う。しかし、画面に目は釘付けになり、“蒼”の名の通り、鮮やかな青色の舞台衣装の蒼真の甲冑姿にはため息が漏れ、鳥肌が立った。

<ゲキ×シネ>には、生の舞台鑑賞では体験できない種類の熱を感じることができる。スクリーン上にクローズアップされた役者の表情、息遣い、汗や涙が、より臨場感を与えてくれるのである。

開演後はやり直しがきかない舞台公演では、その独特の緊張感が俳優たちから一期一会ともいえるいい演技や表情を引き出すものだ。シネマカメラ20台を駆使して撮影されるという<ゲキ×シネ>は、そうした舞台の所産をつぶさに記録した後、膨大な時間をかけて1本の映像作品へと生まれ変わる。編集された舞台は、より深みの増した作品となる。

<ゲキ×シネ>は、演劇をシネマカメラで撮影、編集し、映画館で上映する劇団☆新感線の公演形態。天海祐希や松山ケンイチをはじめとするトップスターをキャストにした冒険活劇や音楽劇が、目の前で繰り広げられる。舞台特有の臨場感に観客は感動と興奮を覚え、余韻に酔いしれる。生の舞台は一度きりだが、何度も味わえるのも特徴。もう一つの演劇形態、<ゲキ×シネ>を体感してみた。



ゲキ×シネ『蒼の乱』 / (C)2015 ヴァイレツァ・劇団☆新感線

2011年に公開された『鬪城の七人』では、この技術を駆使した美しく迫力のある殺陣の場面が見どころである。ワンフレームで捉えるのではなく、あらゆる角度から撮影した映像をつなぎ合わせることで、より鬼気迫る殺陣の場面が成立しているのだ。ここぞ!という場面では役者の顔をアップで抜いてくれるため、私たちは舞台の世界により深くはまり込んで行く。

演劇の公演地以外で鑑賞できるのも、<ゲキ×シネ>ならではのこと。演劇は複数箇所では同時には上演できないうえ、人気公演となればチケット完売は当たり前。大都市でしか公演されない作品も数多くあるの

で、地方に住む人にとっては遠い存在である。しかし<ゲキ×シネ>として映画館で上映されれば、人気舞台を気軽に楽しむことができる。また価格も2000円程度に設定されており、チケット代が高いなどの理由から普段は演劇を見ない人も気軽に鑑賞することができる。

演劇を敬遠していた人、一度生の舞台を観劇したことがある人、そして新たなジャンルを体感したい人。<ゲキ×シネ>が誘う非日常の興奮と感動に酔いしれてみてはいかがでしょうか。

あっ!の展覧会 『村上隆の五百羅漢図展』



村上隆《五百羅漢図》(=部分、2012年)

©2012 Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co.,Ltd. All Rights Reserved.



『村上隆の五百羅漢図展』

森美術館(東京・六本木) 2015年10月31日~2016年3月6日

全幅100mの大作絵画はなぜ生まれたのか

絵には生まれるきっかけがある。きっかけがあって生まれた絵には、存在の必然性があると言ったほうがいいのかも。村上隆さん独自の筆致で大小さまざまな羅漢像が並ぶ全幅100mの大作『五百羅漢図』にも、制作につながるいくつかのきっかけがあった。

「宗教的な動機があったのですか。もう一度見直してみたいですね」

10月末に森美術館(東京・六本木)で始まった『村上隆の五百羅漢図展』のプレス説明会の席上で、美術史家の辻雄雄さんは村上隆さんにこう言った。

2012年に中東のカタールで公開されて話題を呼び、今展で日本初公開となった『五百羅漢図』。全幅100mの大画面に、鬼、竜、虎などの姿を交えながら、大小さまざまな羅漢500体が並ぶ。実際に目にして感じるのは、大作ゆえの説得力だ。一方でマンガやアニメを思わせるのは、村上さんの作品たるゆえん。宗教画の歴史から見れば、はみ出した例と捉える向きもあるかもしれない。プレス説明会の村上さんの言葉から、『五百羅漢図』誕生の経緯と存在意義を改めて読み解きたい。

話は11年にさかのぼる。当時、月刊誌『芸術新潮』に連載していた村上さんと辻さんの往復書簡的企画記事「ニッポン絵合せ」の中で、辻さんが数回にわたって五百羅漢のことを取り上げた。この連載は、辻さんが書いた文章に村上さんが絵と文章で応えるスタイル。折しも、江戸東

京博物館では狩野一信の五百羅漢図の展覧会が開かれて江戸末期の絵師、狩野一信が描いた100幅の五百羅漢図が展示されていた。一方、辻さんが館長を務める滋賀県のMIHO MUSEUMで開催された『長沢芦雪奇は新なり』展には、江戸中期の絵師、長沢芦雪が3センチ四方の画面の中に描いた豆粒の集合体のような『方寸五百羅漢図』が出品されていた。仏教美術史の中では盛んになったのが江戸中期以降と比較的新しく、主流とはいえない五百羅漢に、にわか注目が集まっていた時期だった。辻さんとやり取りをする中で、村上さんの心には、五百羅漢のことが大きく引っかかったようだ。

11年は東日本大震災があった年だ。村上さんは震災関連のドキュメンタリー番組を見て、「(亡くなった)お父さん、お母さんが空から見ているから大丈夫」といった言葉をおとなが子どもに発した場面に出会い、そこに「宗教発生の瞬間を見た」という。大震災のような状況下では、「空から見ている」と論ずることによって、方便だとしても心の安寧がもたらされ、宗教の発生につながるというわけだ。宗教画の存在の必然性も感じたに違いない。

そんな中で、作品の制作依頼がカ

タルから来る。先方とやり取りをするうちに、かなりの大作を設置できる状況になった。そして制作したのが『五百羅漢図』だった。同作が公開されたのは、12年2月に同国の首都ドーハで開かれた村上さんの個展『Murakami - Ego』。震災後1年もたたずにこの大作を完成したことに、今さらながら驚く。美大生ら200人をアシスタントとして、工房的な方法で制作したのも村上流。作家個人での制作を重視する現代の美術界の常識への問いかけの姿勢を貫いている。

取材・文・撮影 = 小川敦生
レイアウト = 小室明久



村上隆(むらかみ・たかし) 美術家。1962年東京都生まれ。93年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2007~09年『©MURAKAMI』(ロサンゼルス現代美術館、ビルバオグッゲンハイム美術館ほか)、10年『MURAKAMI VERSAILLES』(ヴェルサイユ宮殿)など海外での個展多数。06年第56回芸術選奨文部科学大臣新人賞(芸術振興部門)、「ベスト展覧会」受賞(ニューヨーク/AICA)など国内外での受賞多数。著書に『芸術起業論』(06年、幻冬舎)『創造力なき日本 — アートの現場で蘇る「覚悟」と「継続」』(12年、角川書店)ほか。13年に実写映画監督作品『めめめくらげ』を公開。08年に『タイム』誌が選ぶ「世界で最も影響力のある100人」に選出。有限会社カイカイキキ代表。

Whoops! [ウープス] 2016 WINTER Vol.12

編集長 = 小川敦生 (多摩美術大学芸術学科教授)

編集 = 大橋洋介、大村良輔、加藤千裕、河野から、小林真弓、中村昂史、宮坂咲紀、

ド・ソルビ、笹木一平

誌面デザイン = 大村良輔、小室明久、中村昂史、宮坂咲紀、笹木一平

表紙写真 = 『それからの街』上演風景 (photo by takaramahaya, P.2 参照)

発行 多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723

印刷 多摩美術大学芸術学科編集室

問い合わせ先 = aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webzine「タマガ」 = QRコード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。

Whoops! について



TAU FIELDWORK



本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。誌名「Whoops!」は、「あっ!」という驚きを表しています。あなたの中で何か弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。そんな思いを込めて制作しました。お読みいただくうちに小さな「あっ!」が生まれてくれますように!

あっ! の場所

ゲームに出てきそうな地下帝国!? 大谷資料館を探検する



知る人ぞ知る撮影の聖地としてGLAYやX JAPANのプロモーションビデオ、『仮面ライダー電王』や『るろうに剣心』などの映画のロケで使われることが多い宇都宮市の大谷資料館。一体どのような世界が待ち受けているのか、その魅力を探っていききたいと思う。

「寒い...」。大谷資料館の建物に入り、階段を下って第一声に発した言葉がそれだった。夏だというのに空気は冷え、じわっと湿気が体にまとわりつく、砂か埃か、あるいは水が混じったにおいが鼻をつく。このにおいは今いる空間がふだん接しているのとは異質なものであると私に訴えかけてくる。階段を下るたびに外の世界から遮断される感覚に、好奇心と本能からきた恐怖が支配する。下りきった先に見えたのは広大な地下世界だった。まるでロールプレイングゲームのダンジョン

(洞窟などの冒険の舞台となるような場所)に出てきそうな空間に、眠っていた子供心をくすぐられた。

大谷資料館について簡単に説明をしておこう。ここは資料や物を集め、建物の中で展示している普通の博物館とは違う。ここでは大谷石の採石場を一般公開し、使われてきた道具や関連する資料を展示している。大谷石は耐火性に優れた建築材料として、防火壁の一部や石垣等に使用されている。採石の歴史は長く、最も古い記録で確認できるのは1500年前。現在も盛んに採石が行われているという。この資料館は、その長い採掘の軌跡が作った空間でもあるわけだ。それが見られるだけでも、足を運ぶ価値はあるだろう。

資料館の中には使用されていたいくつかの道具が説明と共に展示されていた。入り口にあたる建物では、一人では持てないであろう大きさのチェーンソーや手掘り時代に使われたツルハシ、大谷資料館のジオラマなどが展示されている。このジオラマがまた大きく、一枚の写真に収めるのが難しいほどだ。階段を降りて坑内に入ると、採石場がいかに大きいかを改めて実感する。トロッコと見られる道具はずいぶん錆びついており、往年の現場をしるばせる。

そのまま道なりに進んで行くと洞窟のような空間を利用したアーティスティックな展示をいくつか眺めることができ、これがまた美しいのだ。もともとの採石場の雰囲気を保ちつつ、作品が赤や青の照明で幻想的にライト

アップされている。この場ならではの「アート」がここにはある。

さらに道なりに進むと、ライブやプロモーションビデオの収録用と思われるステージがあった。椅子を並べた客席を含んだ空間は一般のライブハウスより広く、響きもよさそうだ。いわば天然のライブハウスである。ここで、プロモーションビデオを制作したGLAYやX JAPANが見たのと同じ景色を見られたことに、胸が熱くなった。

資料館から歩いて10分の場所には、高さ27mの大谷平和観音がある。ビル7階に相当する像の迫力は圧巻の一言。終戦後、採石場の壁面を彫ったもので、当然、石造である。付近には、国の重要文化財に指定されている大谷摩崖仏がある。千手観音、釈迦、薬師、阿弥陀をやはり石の壁面に彫ったもので、こちらは平安時代の作とも言われている。いわば「石の秘境」ともいえるこの一帯は、冒険心を満たしつつ石の文化史を楽しむことができるなかなか貴重なスポットだ。



《大谷資料館》

〒321-0345 栃木県宇都宮市大谷町909

<http://www.oya909.co.jp>

取材・文・撮影 = 笛木一平

レイアウト = 小室明久



象の鼻パークに出展した曾谷朝絵さんの《虹の家》

横浜イルミネーション物語

「なぜか周りにカップルが集まってくる…」

歩き始めて無性に悲しくなったのは、横浜の港に久しぶりに出かけた時のこと。昨年10月の終わり頃だった。だが、その直後に訪れる景色によってそんなネガティブな感情を吹き飛ばされた。海を照らす光の世界に心を奪われたからだ。

港を美しい光で満たす『スマートイルミネーション横浜』は毎年期間限定で横浜の赤レンガ倉庫付近、象の鼻パークで開催されるイベントである。LEDや太陽照明などのエコロジーな技術と光を使ったアートを港という場と融合させる試みで、2011年にスタートした。作品の展示に携わっているのは、

アーティストから学生、企業まで幅広い。その美しさたるや、海が見える夜の公園で恋の告白シーンを撮りたいテレビドラマがあるならば、ぜひ使うべきだと思ってしまうほど。これぞアートの力である。

体験型のイベントも多かった。蓄光ボードにペンライトで絵を描いたり、ワークショップで物を

作ったりすることができる。アーティストの作品に心を癒された後は自分で何かを作れば、さらにイベントを楽しめるかもしれない。次の訪問時にはまたトライしたい。

【スマートイルミネーション横浜 2015】

会期：2015年10月30日～11月3日

会場：象の鼻パーク、横浜港大さん橋国際客船ターミナルほか

参加作家：高橋匡太、曾谷朝絵、L.B.P（椋村和美・LIUKOBO）、穴井佑樹 × 手塚健太郎ほか